



あなたの一手が

地球を^{みらい}決める

世代間環境フォーラム 2003

～ 明日を担う青年の道標 ～

事業報告書

**The Report Of
Inter-generational Environment Forum 2003**

Eco-League (Japan Youth Ecology League)

世代間環境フォーラム 2003 報告書 目次

はじめに	002
世代間環境フォーラム 2003 概要	003
世代間環境フォーラム 2003 の目指したもの	004

第一章 イベント・企画概要

パネルディスカッション	006
青年活動発表	007
分科会	008

第二章 運営報告

広報	016
渉外	020
総務	021
決算	025
参加者アンケートから	026
総括と今後	030
読本紹介	031
主催団体エコリーグについて	032

はじめに

「第一線で活躍する専門家の方たちと、近い距離で議論できる場を作りたい。」
約1年前に感じたこの想いが、世代間環境フォーラム2003を開催するきっかけとなりました。

今世紀という時代を、私たちは環境問題解決のために戦い続けねばなりません。
地球温暖化、合成化学物質...、数世代にわたって甚大な影響を及ぼす問題が山積みされています。これらは、次世代の育成も視野に入れて取り組まなければならない問題です。

青年は“ちから”をつけねばなりません。“ちから”とは、知識であり、経験であり、そして人を動かす情熱です。そして、世代間環境フォーラム2003は、青年が“ちから”をつけるためのプロジェクトなのです。

約1年間、議論と試行錯誤を重ね、何とか開催にこぎつけることができました。
これまでの道のりは楽なものではありませんでした。しかし、参加者が将来へと飛躍していくきっかけになるのならば、我々にとってこれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、講師の方々ならびに協賛・後援団体の方々のご協力のもとで無事開催することができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

国青年環境連盟(エコ・リーグ)
世代間環境フォーラム2003
実行委員長 福島宏希

世代間環境フォーラム2003 概要

目的

将来環境問題に関わっていく青年が、環境分野で活躍している第一線の企業、政府、NPOの方々と語り合い、刺激しあうことによって、将来活躍していくための土台を形成する材料を提供する。

日時 2003年6月15日 9:30～18:00

場所 慶応大学日吉キャンパス

対象 大学学部生を中心とした青年層

内容

午前の部

パネルディスカッション(詳しくは8ページ)

『環境先進国「日本」への道～各立場の課題と展望 京都議定書から探る～』

青年活動発表(詳しくは9ページ)

全国の青年環境団体と環境系の大学研究室の中から、独自の環境活動を行っている2団体によるプレゼンテーション

午後の部

分科会 (詳しくは10～13ページ)

12のテーマに分かれ、それぞれその道の専門家を招いての講義、ディスカッション

参加者数 (参加者について、詳しくは15～16ページ)

全日程参加 131人

午前の部のみの参加 64人

午後の部のみの参加 6人

合計 201人

主催 全国青年環境連盟(エコ・リーグ)

後援 日本経済新聞社 環境省 横浜市 東京青年会議所 日本IBM株式会社

協賛 東京電力(株) セイコーエプソン(株) 新日本製鐵(株)
(株)三井住友フィナンシャルグループ

世代間環境フォーラム2003

~ そのコンセプト ~

世代間環境フォーラム2003の目的は、将来環境問題に関わっていく青年が、環境分野で活躍している第一線の企業、政府、NPOの方たちと語り合い、刺激しあうことによって、将来活躍していくための土台を形成する材料を提供する場をすることです。

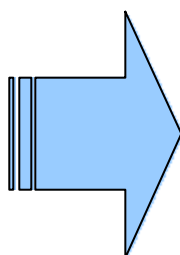
今日、あらゆる立場において環境への取り組みは本格化してきています。しかし、根本的な問題解決を目指した対策は、いまだに不十分と言わざるを得ません。地球温暖化や合成化学物質など、今後数世代にわたって真剣に取り組まなければならない難問が山積みされています。この様な問題認識の上で、環境分野の第一線で活躍している方と青年が語り合い、刺激しあう場が必要であると考えました。

現在の社会 = 移行段階

- ・ 大量生産・大量消費・大量廃棄
- ・ 循環しない資源
- ・ 経済成長優先の政治経済体制
- ・ 環境問題に興味関心のない市民



- ・ 循環型社会に向けた法体系の整備
- ・ ISO14001 取得など、企業努力の本格化
- ・ 環境 NPO の台頭
- ・ グリーンコンシューマーの浸透



目指す社会 = 持続可能な社会

- ・ モノに依存しすぎない社会
- ・ 環境負荷をかけずに
資源が循環するシステムの確立
- ・ 環境と経済の調和



人間活動によって地球の環境が
大きな被害を被ることがなく、
人間にとっても暮らしやすい世界

取り組みは加速している。ならば、このまま行けば環境問題はいずれ解決するのだろうか？

答えは、NO です。私たちの社会はあまりにも環境に対して負荷をかけすぎていて、現在の取り組みでは問題の大きさに対して、いまだ不十分です。

現在ある地球温暖化に代表される地球環境問題、そして環境問題と密接な関係にある貧困や不平等を解決するには、数世代先までを視野に入れた戦略的な取り組みが必要になってきます。

戦略的な取り組みの成否は、将来様々な面で環境問題と直面するであろう現在の若者が、いかに実力を発揮し、問題に立ち向かっていくかにかかっています。

このためには、若者がその豊かな発想力のある間に環境問題の現状と社会の現場における問題の複雑さを知り、さらに問題解決能力を養うことが重要です。

これこそが、私たちが今なすべきことなのです。

第1章.....イベント・企画概要



パネルディスカッション

「環境先進国「日本」への道 ～各立場の課題と展望 京都議定書から探る～

地球環境問題が世界中で問題となっている今日、日本でも様々な立場から様々な環境への取り組みが各立場の強みや弱点を抱えながら行われている。そこで今回のパネルディスカッションでは地球温暖化問題を例にとり、実際に今問題に取り組んでいる政府、企業、NGOの社会人の方々から各立場の活動の現状を話していただき、その相違点や問題点、今後世界の中の日本としてどうすべきと考えているか等を青年層が知り、考えていこうという趣旨のもと、行われた。

また、世代間環境フォーラム2003の一番目の企画であるため、フォーラム参加者全体への導入企画とし、環境問題へのアプローチの大枠を伝えられるものを目指した。

当日は、「環境先進国「日本」への道 ～各立場の課題と展望 京都議定書から探る～」と表題を掲げ、各立場で活躍する4人のパネリストと、環境問題に精通している大学教授によるコーディネーター(下記参照)を迎えた。

まず、各パネリストに10分ほどで 環境問題に対しての取り組み、立場における強みと弱み、現在の立場間の協力体制と今後の課題、世界の中の日本として今後どのような方向性を目指すべきか、そして 青年層は今何をすべきかをパワーポイントを使って発表して頂いた。その後、コーディネーターからの細かい質問に、各パネリストに答えてもらい、最後に会場の学生からの質問も受け、双方向的な活発な議論が展開された。

各立場間の主張は様々で対立する点も見られた。しかしそれは立場間の相違点や問題の難しさをわかりやすく象徴しており、日本の現状をリアルに伝えることができたと思う。短い時間での議論だったためもっと話しが聞きたかったとの声も聞かれたが、このパネルディスカッションをきっかけとして、その現状を知った学生がこれからの環境活動、また進路に向けてさらなる挑戦をおこしてもらえたら幸いである。

<パネリスト>

政府・・・畑田響氏(環境省 地球環境局地球温暖化対策課)

企業・・・佐々木緑氏(東京電力株式会社 環境部生活環境グループ)

鈴木紀夫氏(ナットソース・ジャパン株式会社 シニアマネージャー)

NGO・・・平田仁子氏(気候ネットワーク 運営委員)

<コーディネーター>

鳥井弘之氏(東京工業大学教授兼日本経済新聞社論説委員)

青年活動発表

-同世代の先進的な活動を知る-

全国の青年環境団体と環境系の大学研究室の中から、独自の環境活動を行っている2つの団体にその活動についてプレゼンテーションをして頂いた。

コンセプト 学生にとっては、同世代の先進的な活動を知ることは、自分たちの活動を活性化させるきっかけとなるだろう。また、自分たちの活動と比較し、自分たちの位置を知る手がかりになるだろう。

社会人にとっても、若い世代の活動を知ることは、自分たちの事業や活動を行う際の参考になるだろう。また、発表する側にとっても社会人からの意見・アドバイスを受けるいい機会となるだろう。

以上のようなコンセプトの下、青年活動発表を今回のイベントに組み入れた。

発表団体 国内を活動拠点とする青年環境団体のうち、調査・研究・啓発・講演のいずれかに活動基盤を置く団体から、活動内容の計画性や洗練性、社会への発信や情報公開などを総合的に考慮し、大学サークル、インカレサークル、青年NPOの中から1団体、大学ゼミ・研究室の中から1団体を選んだ。前者の中から、SAGE 後者の中から千葉大法経学部倉阪ゼミに発表をお願いした。

当日内容 団体紹介の後、一団体15分、活動についてのプレゼンテーションを行ってもらった。プレゼンテーションの後、会場からの質疑応答の時間を7分設けたが、会場の反応は予想以上によく、少々予定時間をオーバーしてしまった。

また、発表していただいた2団体に加え、先進的・個性的な活動を行っている青年団体、計6団体を紹介する小冊子を作成し、配布した。

まとめ 時間は少々オーバーしてしまったが、多くの人に関心をもって発表を聞いてもらえ、企画としては成功したといえよう。今回の発表に刺激を受けて、青年による環境活動がより活性化されれば、と思う。

分科会

～ 環境と産業のジレンマに挑む～

経済の大きな部分を占め、私たちの生活に身近な2つの産業、自動車と食産業を取り上げ、環境との関係を考察しました。また、環境意識の形成の中心的な要素として、環境倫理、環境教育、環境と金融、環境とマスメディアを取りあげ、そのあり方を考察しました。

分科会ごとに、それぞれの分野の第一線で活躍している方を講師としてお招きし、講義、参加者による発表、議論などを行いました。

フォーラム当日の内容を深いものにするために、分科会ごとに1～2回の事前勉強会を行い、知識を深めました。

また、分科会修了後、分野ごとに他分科会の参加者と、分科会の内容を分かち合うシェアリングを行いました。

12の分科会

自動車

低公害車の開発と普及
自動車リサイクル

よりよい交通政策の追求 (11 ページ)
自動車の環境税 (12 ページ)

食

食品廃棄物のリサイクル
募る食への不信感とオーガニック食品
スローフードの展望 (14 ページ)

ファーストフードの環境経営 (13 ページ)

情報

環境倫理
環境と金融

環境とマスメディア (15 ページ)
環境教育 (16 ページ)

次ページからの分科会詳細について凡例

- (1) 分科会の名前
- (2) 講師(所属)
- (3) 担当者 (所属)
- (4) 分科会参加者人数
- (5) 分科会コンセプト
- (6) 事前勉強会の内容
- (7) フォーラム当日の内容
- (8) まとめ

(1) 低公害車の開発と普及

(2) 門松貴氏 (経済産業省製造産業局自動車課)

(3) 浅岡良彦 (慶應義塾大学法学部3年)

(4) 10名

(5) 第一線で活躍されている講師との意見交換、低公害車の開発と普及に関する議論を通して、各低公害車の普及の可能性を探る。

(6) 第1回: 前半では、資料を踏まえて、低公害車全般に関する知識の共有を図った。後半では、講師から出されたテーマを元に議論を行った。

第2回: 前半では、1回目の議論を踏まえて、低公害車の普及に関して、さらに議論を深めた。後半では、講師にお越しいただき、参加者との交流と質疑応答を行った。

(7) 事前勉強会を通して、使用用途に応じて、各低公害車を使い分けることが重要との見解に至ったため、当日は、具体的に用途別の低公害車を考えることをテーマとした。前半では、2グループに分けてのグループディスカッションと発表を行った。講師には適宜アドバイスをいただいた。後半では、「都市と田舎の比較」という条件を加え、2グループに分けてのグループディスカッションと発表を行った。最後に、まとめとして講師より解説をしていただいた。

(8) 参加者間で何度も議論を行ったが、参加者間での自動車に関する知識レベルにバラつきがあったため、当初は苦労した。しかし、誰もが議論できるテーマを設定し、また、2グループに分けて少人数制のグループディスカッションを行ったことで、最終的には当分科会における結論を提示する方向へと持っていくことができた。当分科会で学んだことは次のようにまとめられると思う。「使用用途や場所によって、各低公害車の優位性は変わってくる。1つの低公害車を技術面だけで良しと判断するのではなく、使用用途や場所に応じた使い分けが必要である。低公害車の開発と普及には、技術面・政策面を含んだ総合的な視点が必要である。」

(1) より良い交通政策の追求

(2) 太田勝敏氏 (東洋大学国際地域学科国際地域学部教授)

(3) 木内茉衣子 (東洋英和女学院大学国際社会学科3年)

市川暢 (早稲田大学理工学部3年)

(4) 13名

(5) 国内でいまだ増え続けている自動車との関わりを改めて考えることによって、私たち自身が自動車に依存しない生活意識、町づくりの視点から交通制度、政策レベルまでを環境対策の一つとして見ていく。このことが、結果的に環境問題、特に排気ガス減少の足がかりになるというコンセプトである。

(6) 第1回は参加者に自己紹介を兼ねて、それぞれが日ごろ抱える町への不満、気に入っている点を話してもらった。その後、二酸化炭素の環境家計簿を参加者に記入してもらい、日ごろ私たちが二酸化炭素に対してどの程度の金額を払っているのかをそれぞれ確認し合った。第2回的前半は、自動車に依存しない生活、町づくりをテーマに話し合った。ここでは、代替手段として公共交通や自転車にも言及した。後半はTDM(交通需要マネジメント)の説明をしてから、当日の課題の説明をした。

(7) 交通渋滞を減らすことを目的とした交通政策を施すという、課題の内容をそれぞれの立場から発表した。その発表内容に対して講師からの講評をしていただいた。最後に、これまでの分科会の内容を踏まえた上で「私たちは何をすることができるのか?」ということ話し合った。

(8) 参加者の幅広い意見、講師による専門的な意見を消化していくことによって、交通政策全体を理解することができた。そして、この環境問題から交通政策を追及していくということは、私たち自身のライフスタイル全体(住まい方、環境負荷の負担の仕方、社会とのかかわり方、自動車の乗り方)と強く関わっているということが言えるということが分かった。

(1)自動車リサイクル

(2) 小林浩史氏(経済産業省製造産業局 課長補佐)

(3) 林位宜(横浜国立大学教育人間科学部地球環境課程2年)

(4) 7名

(5) 自動車産業は日本の主要産業の一つであり、その生産から廃棄までの一連の動きは大きく環境に影響を与えるものである。国は2000年に循環型社会形成促進法を制定し、現在各分野におけるリサイクルシステムの構築が急ピッチに進められている。自動車も、勿論そのリサイクル政策の対象分野となっており2004年度には自動車リサイクル法が施行される予定である。本分科会では、実際に同法案の成立に尽力された経済産業省製造産業局、小林浩史氏をお呼びして、自動車リサイクルシステムのあり方を考えていく事を目的とする。また自動車リサイクルシステムを素材としてリサイクルシステムの一般的特徴についても学ぶ。

(6) まずは、自動車リサイクルに限らず「リサイクルは本当にいいのか?」ということをテーマにリサイクルに批判的な意見を資料として配り、それを読んだ後に参加者同士でリサイクルの是非について議論をした。そしてその後、EPRというリサイクルにおける基本原則について勉強をし、最後に自動車リサイクル法の成立背景について勉強をした。

(7) 分科会前半では小林氏から自動車リサイクル法の概要を説明していただいた。分科会後半では参加者から質問という形で、自動車リサイクルシステムの各箇所を分析していった。最後にユーザーとしてどのように自動車リサイクル法に関わっていくかを参加者の方々に述べていただき締めくくりとした。

(8) 自動車リサイクル法の仕組みはなかなか複雑だが、小林氏の分かりやすい解説を通して参加者の方々も理解が深められたと思う。今回の議論を通して参加者の方々が来年度から施行される自動車リサイクル法にユーザーとしての自分なりの関わり方を見出し、またリサイクルシステムの仕組みに少しでも関心を抱いてくれればと思う。

(1)自動車の環境税

(2) 足立治郎氏(「環境・持続社会」研究センター事務局長代行)

(3) 磯野 泰子(法政大学社会学部社会学科2年)

(4) 5名

(5) 温暖化対策を始めとする環境対策が急務となっている今、行政、特に財政という側面からこれにどのようなアプローチが可能なのか、現状を知りそして可能性を考えることで、炭素税、環境税についての理解を深めることを目指す。

(6) 2回の事前勉強会ではどちらも講義形式で、第1回で自動車に関わる環境税だけでなく環境税全体の知識について、第2回で炭素税について実際に講師の足立治郎氏の所属される炭素税研究会の「地球温暖化対策推進のための『炭素税』の早期導入に向けた制度設計提案 Version 4」を例に挙げて学び、その他環境税についての資料を読んだ。

(7) 当日は、講師による炭素税を中心とした環境税についての講演を行っていただいた。その後、参加者との質疑応答を行って環境税のしくみやあり方の可能性について学んだ。参加者の率直な疑問に答えていただくことで環境税についての正しい知識を学んだ。

(8) 環境税という題材は非常に複雑で難しいものであり、ワーキングやディスカッション形式をとるには専門的な知識を多く必要とする。よってここでは、専門家である講師の講演と質疑応答から、今後環境税の話題が出たときにここで学んだ正しい知識のもと、自分の意見が持てるレベルになれるよう勉強会形式にした。2回の事前勉強会と当日のみで伝えられたことはもちろん十分ではなかったが、質疑応答では予想以上のたくさんの質問が出たので、少なくとも具体的な疑問を持てるほどには環境税を理解してもらえたかと思う。

(1) 食品廃棄物のリサイクル～社会システムの模索～

(2) 森田富幸氏(農林水産省総合食料局食品産業企画課食品環境対策室)

(3) 辻景太郎(慶應義塾大学法学部2年)

(4) 12人

(5) 2001年、食品リサイクル法が施行され、食品廃棄物(生ごみ)のリサイクルは一步を踏み出しました。しかし依然として、一般廃棄物の三割にも相当する年間2000万トンという膨大な量の食品廃棄物がゴミとして捨てられている。この問題はダイオキシンや農業とも絡んでくる。そして、食品廃棄物をごみとして捨てる行為自体が、食糧の60%を外国からの輸入に頼る現状を見ても、また倫理的に考えても、どうにかしなければならないのは明らかだと考えられる。しかし、食品リサイクルを促進する社会システムの整備は遅れており、食品廃棄物の問題に取り組むことは急務だと言える。

(6) 第1回は打ち解けた雰囲気を作るために、ゲームをしながら自己紹介をした。

第2回は当日の議論のために、食品リサイクルについての知識を付けてもらった。

(7) 冒頭、講師の方に講演をしていただき、それを踏まえて様々な論点について話し合った。食品リサイクル法についてや、一般家庭からの廃棄物といったことを話した後、この問題に対して各立場が負うべき責任・役割について話した。

(8) 当分科会では、官庁で食品リサイクルを管轄している農水省の方を講師としてお招きして意見を仰ぎながら、食品廃棄物の問題について話し合った。参加者は、身近な「食」について食品廃棄物のリサイクルという視点から捉える機会を得、食品廃棄物の問題や農業に関心を高めたようだった。

(1) 募る「食」への不信感とオーガニック食品

(2) 加藤一隆氏(社団法人日本フードサービス協会 専務理事)

(3) 田中将之(慶應義塾大学理工学部2年)

濱口真衣(東京大学文科一類2年)

(4) 6名

(5) 牛肉偽装事件や遺伝子組み換え食品問題など、【食】への不信感が増大しつつある昨今。この現状に対して、行政・企業・消費者の三者はどうあるべきか。また、それに伴い注目されつつあるオーガニック食品を例にとって「食」の問題を考える。

(6) 第1回は参加者との交流をメインとして、自己紹介を行った後、オーガニック食品の現状についてのプレゼンを行った。また、終わった後は実際オーガニック食品を推しているレストランに行き食事をした。第2回は講師の加藤氏を招き、外食産業の現状について講演をして頂いた。その後は講演の内容をふまえた質疑応答を行った。

(7) 前半では「現代農法と有機農法はどちらが優れているか」というテーマについて、参加者が2つのグループに分かれ、双方の利点、課題等を考察し、ディベート形式で発表した。ここでの有機農法とは「無農薬・無化学肥料での農法」のことで、それ以外のものを「現代農法」とした。

後半では、 「現在、なぜ食への不信感が増大しているのか」

「食品表示の問題点」 「JAS法改正の是非」

「食への不信感の解消のために、消費者のあるべき姿とは」

という3つのテーマを基に、講師の方を交えてディスカッションを行った。

(8) 「食への不信感」の解消のために必要なのは、行政・企業・消費者の三者がしっかりとコミュニケーションを図ることだ、という結論に至った。私たち消費者としては、既存の情報により関心をもって能動的に取り入れていくこと、情報の取捨選択ができる知識をもつこと等を心掛けることが大切である。

(1) スローフードの再考～スローフードからみる「食」の展望～

- (2) 吉開俊也氏(ソトコト編集部・日本スローフード協会事務局準備委員)
- (3) 島田由紀子(法政大学人間環境学部2年) 武田ゆかり(法政大学人間環境学部2年)
- (4) 13名
- (5) 今の日本の社会を考えながら、スローフードを追求すること。
- (6) 参加者同士、人間にとって欠かすことの出来ない食についてが意見を述べ、知識の交換をした。
また、基礎知識としてスローフード協会についての勉強を行った。最後に、参加者が主体的に行う取材の説明をし、実際にスローフードのお店にお食事に行った。そこで、お店のこだわりについてお話を伺った。
- (7) スローフードがなぜ今の社会の中で注目を浴びてきているのか。“地球にやさしい食事 スローフード”から始まり、講師の方に講演をしていただいた。テーマは“吉開さんにとって、スローフードとは何か？スローフードから今の社会を考える”。そして、参加者が今考えていること、不安に思っていること、疑問に思っていることをそれぞれぶつけあった。その中で、講師の方が学生に聞きたいこと、「今まで食べてきた物で、自分が納得できるものは何なのか？」について討論をした。そこから、今の社会と食との関係、人間と食との関係について議論を交わした。最後に、参加者なりのスローフードの副題を考えた。その参加者なりの副題が、スローフード～楽しい人生ワクワクごはん「人生の快樂を食べる！」である。
- (8) スローフードという言葉のみの先立ちに伴い、未だにスローフードという言葉の概念は明確ではない。よって、参加者同士で話し合いをし、講師から意見を聞き、個人で想いを持ち帰る形になった。その中の一つの考えとして、スローフードは、食を楽しむこと、食にこだわりを持つこと。つまり、食は人間にとって欠かすことのできないものであるから、必然的に人生の快樂へとつながるのである。

(1) ファーストフードの環境経営

- (2) 講師 稲永弘氏(株式会社トーマツ審査評価機構代表取締役社長)
- (3) 担当 鈴木祥祐(日本大学経済学部経済学科3年)
- (4) 分科会参加者人数 13名
- (5) ファーストフード会社が、循環型社会に適応させるためには、どうしたらよいのでしょうか。それには、経営方法の変更、つまり、環境経営に取り組まなければならない。しかし、環境経営とはいったい何なのか、どう行うのかがまだ確立されていないのが現状。よって、この分科会では、ファーストフード会社を例に取りながら、環境経営について勉強し、実際に戦略を考えてみることを目的とする。
- (6) 第1回は参加者との交流をメインとして、6つの窓という自己紹介法を行った。そのあと、環境経営、ファーストフードについて勉強した。また、ファースト店の現状を調べることを課題として出した。第2回は環境マーケティング、食品リサイクル法などについて勉強した。当日までの課題として、ファーストフード(今回は、マクドナルドとモスバーガーを取り上げてみた)の環境戦略を考え、まとめてきてもらうようにした。(6グループに分かれた)
- (7) 講師による「企業の環境経営」の講演
各グループの「ファーストフードの環境経営戦略」案の発表
それぞれの戦略をもとに意見交換および討論
マクドナルドが4案、モスバーガーが2案
それぞれのファーストフードの現状を前提として、短期・長期の戦略が挙げられた。また、長・短所を活かされ作られていたので、現実的な討論ができた。
各案に対して講師によるコンサルト(当日、事前に戦略案を見ていただいた)
- (8) ファーストフードの環境経営という独自のものは、まだ確立されていない。というよりか、今ある経営をいかに環境経営のシステムに近づけていくかが、課題とされている。また、私たちの生活に密着しているファーストフードでは、環境経営が確立されれば、私たちに大きな影響を与えることも考えられた。だからこそ、企業の環境対策に対しても目を向けることが重要であることがわかった。

(1) 環境倫理

(2) 鬼頭秀一氏 (恵泉女学園大学人文学部人間環境学科教授)

(3) 佐藤大剛 (早稲田大学理工学部2年)

春原麻子 (東京大学教養学部3年)

(4) 12名

(5) 様々な問題を複雑に内包している環境問題を解決しようと考えたとき、技術的な事項や知識だけではなく、判断・行動の根本となる倫理を形成していくことは非常に重要である。また環境倫理学を学ぶことは様々な視点に乗っ取った考えかたを学ぶことになり、個々の環境倫理の形成に貢献する。

(6) 第1回は環境倫理思想の系譜について勉強した。第2回は自分たちの考える環境倫理について話し合い、色々な環境・環境問題に対する考え方に触れた。

(7) 昼休みからグループ分けした参加者同士で話し合いをしてもらい、分科会の時間が始まったら話し合った内容についてグループごとに簡単に発表してもらった。その後、講師である鬼頭先生に先生の考える環境倫理学、またその環境倫理学の実践について話していただき、質疑応答をした。そのあとはまたグループ分けしてそれぞれの興味を持ったテーマについて話し合ってもらい、簡単に発表し、最後に鬼頭先生にまとめていただき終了した。

(8) 全体として一つの見解を示すことはしなかったが、環境問題について倫理的な観点から話し合う場として、様々な意見を交流できたと思う。これがそれぞれの環境問題に対する考え方を深めることにつながったなら幸いである。

(1) 環境とメディア

(2) 原剛氏 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

(3) 武井亜樹 (早稲田大学法学部2年)

東寿浩 (慶應義塾大学法学部3年)

(4) 13名

(5) 環境問題は複雑多岐にわたっているため、一般生活者が問題の全体像とその信憑性を追及するのは大変困難である。よって、長期的かつ効果的な解決を図るためにも、社会問題を日常生活にダイレクトに発信する情報関連事業の役割を考える意義は大きい。当分科会では様々なマス・メディアのなかでも、より長く環境問題に関わりのある新聞報道に着目した。

(6) 「環境問題における新聞報道の特色・今後の課題」をテーマとして、新聞比較、現在の環境報道における新聞社の取り組みと問題点についての議論を行った。

(7) 講師の方に新聞記者として報道に携わっていた当時の現場の様子を中心に、報道に対する見解を話していただき、その後30分間参加者の質問にお答えいただいた。特に公害の時代などは、今の学生の体験し得なかった時代のことでもあり、現場に携わった講師の方のお話は胸を打つものがあった。

(8) 事前勉強会を通じて様々な分野の学生が集まったので、専門に踏み込みにくかった面がある。参加者の互いの多様な研究成果や経験を効果的に社会に正しく活用するために話し合いの場が必要とされるであろうという結論にいたったこと、また、当日講師の方の専門的な話と、自分の目で確かめる等の貴重な経験に裏付けされた話をお聞きできたことは大変良かったようだ。

(1) 環境と金融

(2) 田中優氏(未来バンク事業組合理事長)

(3) 伊藤奈々恵(東京大学大学院農学生命科学研究科修士2年)

森谷太香子(法政大学経済学部2年) 井村勇氣(東京大学法学部3年)

(4) 11名

(5) 私たちは、銀行口座を持っていますが、そのお金がどこでどのように運用されているかを知らない。預けたお金は、短期的な利益を追求した、様々な問題を起こしている企業に投資されているかもしれない。以上のような問題意識に基づき、環境問題とお金の流れの関係やその問題点・解決策について考えることを目的とした。

(6) 銀行に預けた預金は、信用創造機能によって預けた額の何倍にもなって市場を回るといって、お金そのものが投機の対象となるような扱われ方をされ経済が不安定化するということを経験した。また、自分が関心をもつ環境問題について、誰がその主体となっているのか、その主体はどこからその資金を得ているのかを参加者に調べてきてもらい発表してもらった。

(7) 事前勉強会を通じ、現在の社会は知らない間に多くの人がさまざまな問題を起こすような事業にお金を回してしまう仕組みになっていることが見えてきた。これをどう変えていけばよいのか、どのような取り組みがあるかを参加者に調べてきてもらい発表してもらった。そのひとつの形として、未来バンクを立ち上げられた講師の田中さんから、その立ち上げの経緯や活動について、市民が中心となって様々な事業を担っていく社会についてのお話をいただいた。

(8) お金は社会に大きな影響を与えるものだ。その流れをよいものにすることによって、社会もよりよいものになっていくはずだ。今回の分科会が、参加者のさらなる行動のきっかけとなると思う。また、参加者には自分の関心のある問題がどうして起きているのか考える、ということをしてもらったが、今後出会うさまざまな問題に対してもそのような姿勢で臨んでほしい。

(1) 環境教育

(2) 飯沼慶一氏(成城学園初等学校教諭)

(3) 小松洋一(東京工業大学工学部3年) 佐々木明人(早稲田大学理工学部2年)

村上秀行(東京学芸大学教育学部2年) 力石みのり(東京学芸大学教育学部2年)

高柳友美(東京学芸大学教育学部2年)

(4) 15名

(5) 「子どもたちに伝えたいこと」を話し合い、授業案を作成する。また、実践授業を検討している。

(6) ゲームなどを通して自己紹介を行い、参加者が仲良くなって活発な議論ができる下地を作ること意識した。そして「あなたにとって環境とは?」「あなたにとって教育とは?」という内容について意見を交換。これには「自分の話を相手に的確に伝える」「他人の話を聞く」「聞いたことを他人に伝える」という能力を鍛えるという意図も込められていた。そして最後に「子どもたちに伝えたいこと」発表し合い、それによって参加者を3つのチームに分けた。

(7) 始めに飯沼先生に環境教育についての話をいただいた。その後、3つのチームごとに当日までに考えてきた授業案を発表した。これを元にどういう授業案にするかについて講師、参加者、スタッフを交えディスカッションを行った。

(8) 環境教育分科会では、当日に話し合った授業案をもとに実際に小学生と一緒に授業をすることを検討している。2003年9月または10月に講師の飯沼先生のクラスで授業をさせていただく予定である。

第2章

運営報告

一つの出会いから始まって

そこから大きなパートナーシップが生まれ

新しい世代は躍動していく・・・

そんな場を提供するため

私たちは活動を続けて来ました



運営報告

～世代間環境フォーラムの裏側～

広報、渉外、総務のそれぞれの仕事を振り返ってみました。

広報

1. 全体の戦略

様々な興味をもった多くの参加者を集めるため、これまでのエコリーグにおけるイベントの参加者が多く所属しているような環境サークルに対する広報だけでなく、環境問題には関わってはいなくとも当イベントと少しでも関係のありそうな、経済や自動車などのサークル、団体、研究室に対しても広報するようにする。

また、社会一般へ当イベントの存在や意義を広く伝えるため、メディアへも積極的に広報する。

2. 概要

HP

—戦略：Web 上での情報公開は現在では必須である。そこでHP には全ての情報、また最新の情報を載せるよう心掛け、参加者の申し込みも主にそこで行った。

また、快適に見られるようHP の見易さ、ページを軽くすることを意識した。

—実際：途中でWeb 担当者の交代があり、作成が遅くなってしまったため、初期の参加希望者を逃してしまったかもしれない。また開くのに少し時間がかかるページも出てしまった。情報量に関しても、主催のエコリーグについてや、分科会とパネルディスカッションの講師に関してのページ、企業の方へのページも作ったほうがよかった。結果的には公開後2ヶ月で約5000 カウントも記録した。アクセス解析によると、初期の4月始めの頃は1日に10 カウント程だったのが、4月の後半から徐々に上がり、5月から当日の6月15日までは毎日40～80のカウントがありました。これは5月に行われた事前勉強会の影響だと思われる。当日直前に特別アクセス数が伸びることはなく、一番多いのは一月前くらいだった。また、エコリーグのHPeco2000 から来る人が全体の25%を占めた。

ML (メーリングリスト) 広報文

—戦略：参加者確保への一番主な手段とし、数回にわけ、適宜その時期に合った最新情報をML やサークルの掲示板へ転送していく。

—実際：約30のML と約20のサークルや学生の掲示板へ全部で4回送った。その時々のも最も強調すべき点、狙うべき参加者層を絞った内容にするよう心がけた。

ポスター

__**実際**：学校へのポスター貼りは、他のスタッフに自分の学校の分をお願いした。これにより無駄が省けて効率のよい広報活動ができた。

研究室・ゼミへの広報

__**戦略**：これまでのエコリーグにおける広報先は環境サークルが中心であったのに対し、当イベントでは学生同士の輪を広げようと、環境に関わっている研究室やゼミの学生、さらには直接環境にはつながっていない研究室やサークルへの呼びかけも行うこととした。メール広報文を送ることが中心である。

__**実際**：まずは研究室やゼミの所在をHPで調べることから始めた。大学によって、研究室のHPがあるところ、ないところがあり連絡先調べはかなり難航した。いざメール広報文を送ってみてもゼミ生専用であったため投稿できず返ってきてしまったところも少なかった。また、研究室宛に送ったところHP管理者（ゼミ生）宛になっていたところがあり、全ての研究室生にきちんと情報が伝わっているのかがわからないこともあった。

良かったことは、メールという媒体を通して研究室、ゼミ経由で学生へ呼びかけることで、勉強する場という意識で、気軽に参加してもらう機会を提供できたことだと思う。

メール広報文を送る作業は、当日直前まで続けた。しかし結果としては研究室、ゼミからの参加者確保はなかなか難しかったようだ。研究室、ゼミへの広報はメールの手軽さゆえにどこまで参加に結びついたかが把握しづらく、新しい取り組みであるためまだまだ手探りではあるが、とても意義のあるものだと思うので、ぜひ継続していきたい。

環境系サイト上のイベント情報欄への書き込み

__**戦略**：日本全国の環境に関心のある人（学生に限らない）に対して広く当イベントを広報する。

__**実際**：約8つの環境系サイトへ書き込みを行った。中にはかなりのアクセス数を誇るサイトもあるため、参加申し込みに至らなくとも多くの人の目に触れたことと思う。

プレスリリース（テレビ局、記者クラブ）

__**戦略**：環境省、経済産業省などの省庁記者クラブや、新聞社、テレビ局へプレスすることにより、参加者確保はもちろんのこと、社会一般へ広く広報することができる。

__**実際**：2つの新聞への記事掲載は果たしたが、省庁へのプレスリリースはイベント直前になってしまったため、早くから行っていれば得られたかもしれない効果を落とした可能性が大きい。テレビ局各社は映像にしにくいなどの理由で放送には至らなかった。

プレスリリース（環境系雑誌への記事掲載依頼）

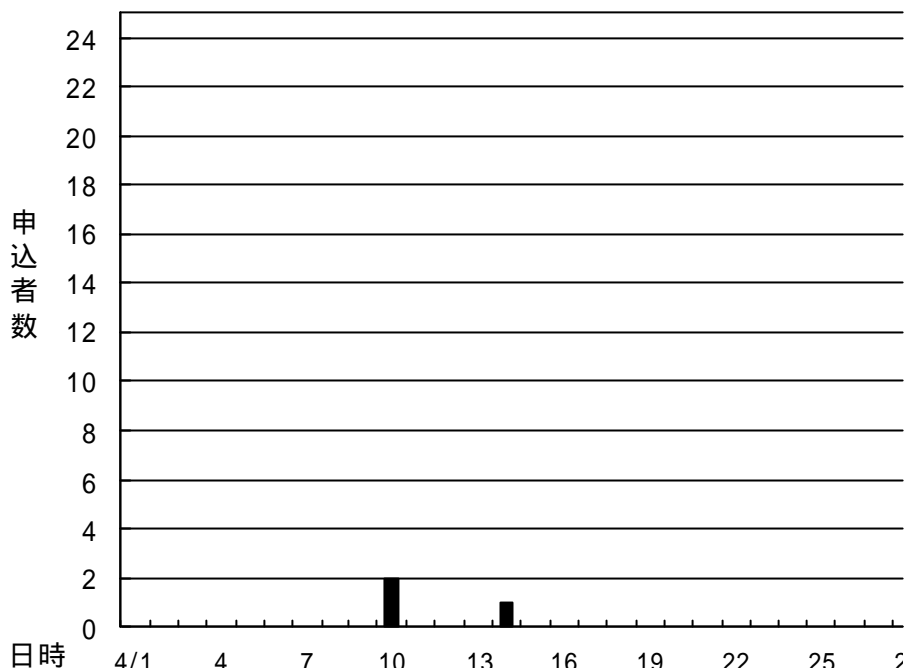
__**戦略**：環境系雑誌を読む人は当イベントに興味を示す人である可能性が高く広報価値も高いと思われる。イベント情報として記事を掲載してもらうことを目指す。

__**実際**：3誌に記事を載せてもらうことができた。

3. 広報活動と参加申し込み推移

注 5月10日は申し込みの1次締め切りであったため、申込者が多い。

また、エコリーグのイベント、3月ギャザリング(2月28日～3月2日)においても広報活動を行った。

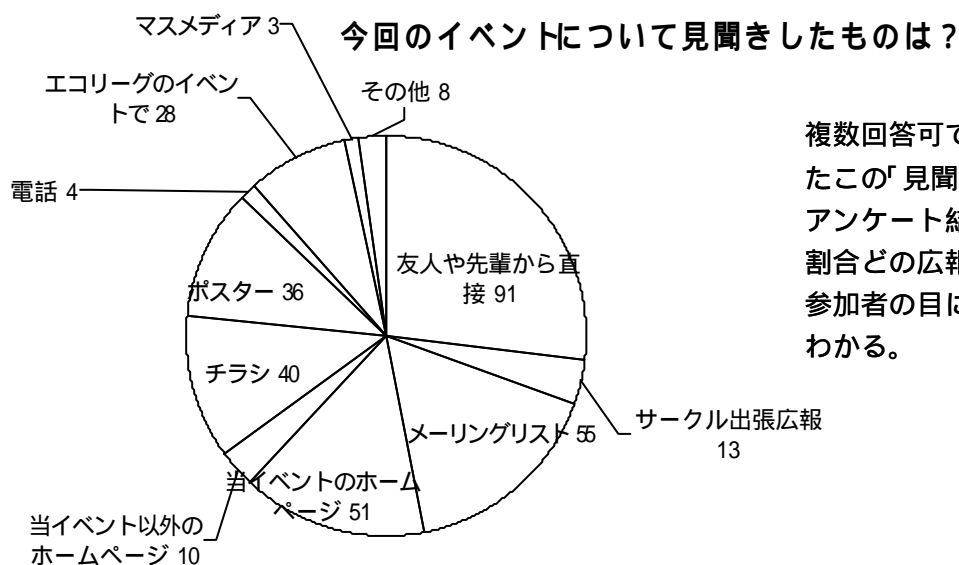


広報の活動

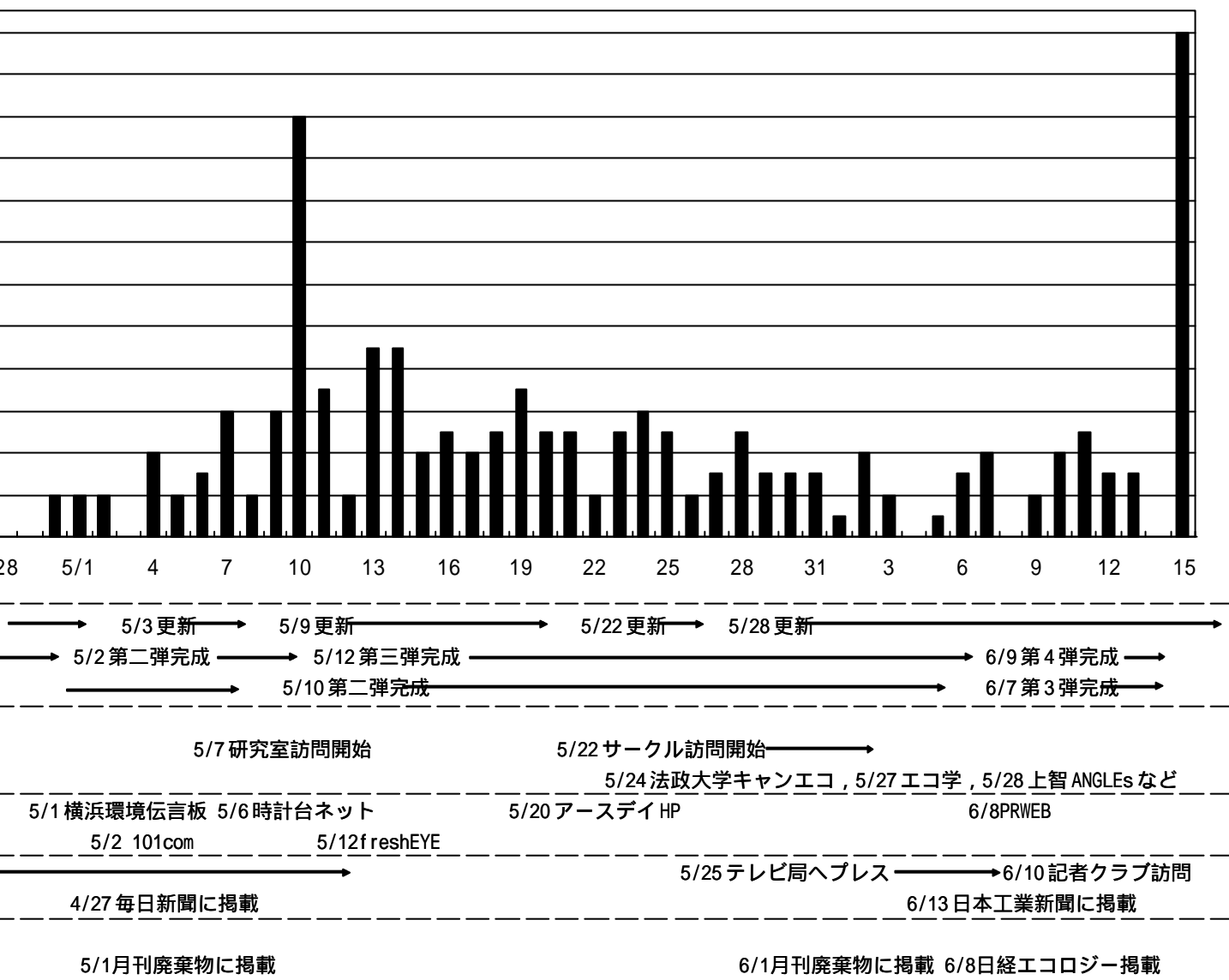
ホームページ	3/10HP 始動 3/30 担当者交代	4/22, 24, 27, 29 更新
メーリングリスト広報文	4/4 第一弾完成	
チラシ、ポスター	4/18 ポスター完成 4/25 チラシ第一弾完成	
研究室、サークル訪問		
環境系サイトのイベント情報欄への書き込み	3月上旬EIC ネット	
プレスリリース	4/18 新聞各社へプレス開始	
環境系雑誌への記事掲載依頼	3/30環境系雑誌へ記事掲載の依頼文送信 4/10環境会議に掲載	

4. 広報の影響

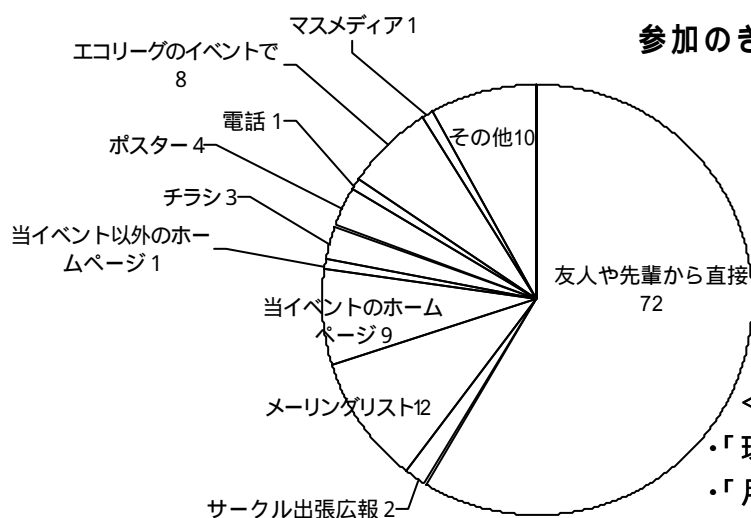
イベント当日に行った参加者へのアンケート結果を一部抜粋する。



複数回答可で答えてもらったこの「見聞きしたもの」のアンケート結果からは、割合どの広報媒体も均等に参加者の目に触れたことがわかる。



参加のきっかけは？



一方「参加のきっかけ」を見てみると、友人や先輩から直接誘われたことが決め手になった参加者が多かったようである。

<掲載雑誌・新聞>

- ・「環境会議」春号 2003 p235 (イベント情報)
- ・「月刊廃棄物」2003年5月号 p115 (イベント)
- ・「月刊廃棄物」2003年6月号 p115 (イベント)
- ・「日経エコロジー」2003年7月号 p101 (イベント)
- ・「毎日新聞」2003年4月27日朝刊
- ・「日本工業新聞」2003年6月13日 環境 (情報ファイル)

渉外

協賛

今回のイベントは、4 つの企業の協賛を得て開催することが出来ました。
協賛を頂くまでの道筋を振り返ってみます。

1 企業の選定

日経環境ランキングに選ばれている企業、過去に学生の環境系イベントに協賛したことがある企業を中心に138社に協賛をお願いした。

2 お願ひした手順

まず、企業に電話をかけ、今回のイベントの資料を送ってよいかをたずね、許可を頂いた企業54社に対して資料をイベント資料を送付した。その後、資料送付した企業に電話で検討していただけるかを伺い、検討して頂けるとの返答を得た企業は9社、そのうちさらに前向きに考えてくださった企業に直接出向いて、今回のイベントの説明を行い、最終的には4つの企業から協賛を得ることが出来た。

3 その他

協賛を得るための活動は、3月ごろから開始、実際に得られたのは4月上旬～5月中旬であった。反省点は、資料を送った企業の一部に対して、その後の電話連絡を怠り、結果的に資料を送りっぱなしになってしまったこと。また、もっと早く活動を始めていれば、もう少し余裕を持って活動できたかもしれない。

後援

今回のイベントでは、5つの機関から後援を頂きました。

基本的な流れとしては、後援をお願いする機関に後援願ひの申請様式を送ってもらい、それを埋めて、資料とともに提出、返事を待つ、といった手順でした。

交渉を開始してから、後援を得るまでには大概2ヶ月間かかりました。最初の後援を得たのは3月のはじめ、最後に得たのは6月のはじめでした。

助成金

次の2つの財団に助成金の申請を行いましたが、助成金を得ることは出来ませんでした。

- ・財団法人損保ジャパン環境財団
- ・財団法人トヨタ財団

世の中に助成金はさまざまあるのですが、環境イベントが申請できる助成金は多くなく、申請時期、その他いろいろな条件・制限などを踏まえると、さらに申請できる数が限られます。助成金を得ることは出来ませんでした。が、上述したとおり、企業からの協賛金を得、なんとかイベントを行うことが出来ました。

総務

総務の仕事は、大きく分けると、参加者対応、会場、受付、資材管理、会計の5つの仕事からなっています。それぞれの仕事の内容、反省点などは次の通りです。

それぞれの仕事について

(1) 役職説明 (2) 事前準備 (3) 当日業務 (4) 事後処理
の順で説明しています。 マークは反省点・改善点などです。

参加者対応

- (1) 本企画における参加者との窓口として、参加者の個人情報の一括管理および参加者への連絡を行う。

- (2) **個人情報管理** 申込情報を「連絡先」「所属等」「参加者対応」の3つのシートに分別しExcelに一覧を保存。情報不足部分は申込者に電子メールまたは電話にて確認を行う。
参加者対応後に一覧表への記入漏れがあり当日の受付にて混乱するという問題が発生した。メールの送受信などと一覧表への記入を一連の動作として作業を徹底する必要がある。

申込受理の連絡 申込者への申込受理通知、および、入金者への入金確認通知を電子メールにて連絡する。文書は雛形を作成後、申込者に合わせて編集を行う。

返信の対応が遅かった。申込が始まる前に充分に対応の手順を決め、各対応日の専任を綿密に決めておく必要がある。また、対応の有無や程度が曖昧になることが発生したため、担当者および総務での頻繁な確認を行う必要がある。

事前勉強会の連絡 事前勉強会の前日または前々日に時間・場所・緊急連絡先等について、確認の電話をかける。連絡が取れない場合は、留守電に入れ、該当分科会の担当者に連絡を引き継いだ。

分科会担当者からも連絡するという二度手間が一部発生してしまうことがあった。実行委員間の連絡を綿密に行う必要がある。

- (3) 当日は受付業務となるので該当業務なし

- (4) **個人情報管理** 事前準備で作成した一覧表に当日申込者・内容変更者の追加修正を行う。

キャンセルなどの連絡 参加費未払者と思われる参加者への連絡や事後キャンセルに伴うキャンセル料の連絡を行う。

未払者の多くは受付での誤認であり、徹底した確認体制を整える必要性が浮き彫りになった。事後キャンセルに伴うキャンセル料については、申込者へ説明が不十分な点もあり、参加者に理解してもらうのが大変だった。このようなトラブルを減らすために、参加費の事前振込は振込の控えを必ず持参させる、キャンセル料の有無・発生条件・程度を明確にするといった対策を行う必要がある。

読本発送作業 参加者への読本発送用の宛名ラベルの作成、および、梱包作業を行う。

会場

- (1) 本企画において、そのイベント会場となる施設を確保し、また当日には参加者の誘導・物の配置・装飾といった会場全体の管理を行う。
- (2) **会場確保** 本企画の条件に合う施設を選定し、予約申請を行う。選定の条件としては、収容人数・部屋数・設備・交通アクセス・施設利用料などである。
条件、特に部屋数・施設利用料、に合った会場を予約することが困難で、開催3ヶ月前になってやっと会場が決まった。この遅れが、協賛・後援の活動や講師渉外へ影響することとなり、企画全体の進行状況に遅延が生じた。
企画進行を円滑に進めるためにも会場確保は迅速に準備すべきである。特に会場として非常に条件のよいオリンピックセンターを使用する場合、1年前から準備をするのが望ましい。
会場下見 当日の参加者誘導の設定や会場設備の動作確認を行う。
実際に設備の動作確認を行えた者が少なかったため、当日の進行に影響を与えてしまった。同一会場で当日同様のリハーサルを行うなどの対策が必要である。
- (3) **会場設営** 各部屋の机や椅子の配置、垂れ幕や装飾、部屋案内の貼付などを行う。また、懇親会会場設営として同様に机や椅子の配置や装飾、飲食物の配膳などを行う。
当日の早朝から会場入りする予定であったため、時間的余裕がなく指揮系統に混乱を生じた。懇親会会場ではBGMの準備ができなかった。本企画のような時間的余裕が少ない場合は、事前に連絡・指示を伝えておき、当日の連絡を最小限に抑える必要がある。また、担当・指揮系統や作業内容などを明確にしておきたい。
参加者誘導 立て看板や案内板の設置や、最寄駅から会場の各所へのスタッフ配置を行い、参加者を誘導する。また、会場内や本会場から懇親会会場への誘導も行う。
会場設備管理 照明や音量など会場設備の設定を行う。
会場下見を行ったものが少なく、機材の使用に戸惑ってしまう事態が生じた。設備機材に触れるものは、全員が事前に動作確認を行う必要がある。会場担当者は、使用するすべての設備の動作を熟知しておく必要があり、即座に対応できるように会場内に待機しておく必要がある。
会場現状復帰 本会場および懇親会会場の現状復帰を行う。また、遺失物搜索も行う。
- (4) **会場への事後報告** 会場の管理窓口への報告を行う。

受付

- (1) 開催当日の参加者及び講師の受付対応、参加者の情報管理を行う。また、当日に配布または販売する資料の準備を行う。
- (2) **アンケートの作成** 参加者の本企画への意識や評価を調査するためにアンケートを作成。また、参加者の環境意識についても項目として加えている。評価に関しては本報告書にて、環境意識に関しては別途作成した読本「環の道標」にて公開している。
ネームカードの作成 ID・氏名・フリガナ・分科会・部屋番号を明記したネームカードを作成する。IDには、性別・職業・会員種別・申込番号・参加形態・懇親会参加の6種類を暗号化した8桁の記号をつけ、スタッフによる識別を試みた。
特に会員案内や懇親会参加識別での活用を目的としていたが、スタッフへの連絡が不十分なため、IDを効果的に活用することができなかった。
当日配布物・販売物準備 参加者への配布物（パンフレット、アンケート、午前の部の補足資料、後援・協賛団体の環境報告書・チラシ・その他の資料）と販売物（エコ・リーグの出版物および講師からの委託物）の準備・管理を行う。
講師の方からの委託物の有無の確認が遅く、少数の委託物しか準備できないこととなった。また、当日配布物全体の管理担当者が受付に不在であり、直前の印刷物もあることも重なり、資料を配布し損ねる事態が生じた。

- (3) **受付設営** 主会場となる大教室前に受付を設営する。設営として机や椅子の配置、機材準備、資料配布の準備を行う。
- 入場受付** 事前申込者は名簿で確認し記録をつけ、参加費未払いの方の参加費支払い手続きをする。当日参加者は参加申込書に記入してもらい、参加費の支払い手続きをする。また、参加者へネームプレートおよび当日資料の配布を行う。
- 受付において、当日支払いなど参加費についてのメモ・連絡・確認のミスが発生した。連絡体制や事前準備の徹底などを怠らずに整えるべきである。
- 講師受付** 講師の来場の際、挨拶や資料配布を行う。
- 受付待機** 常時受付に待機し、参加者への案内や質問対応などを行う。また、帰宅する参加者のアンケートとネームプレートの回収を行う。
- 分科会の部屋やトイレの場所を聞かれることが多かった。パンフレットの会場図は小さいので受付に大きな会場図を設置すべきであった。
- アンケートおよびネームプレート回収** 受付にてアンケートとネームプレートの回収場所を設置し、協力を呼びかける。
- アンケートの回収実績は約7割。時間帯により設置場所が変更する、複数の回収場所がある、懇親会後のアンケート回収が徹底されていない、講師のアンケート回収が徹底されていないという不備が原因と考えられる。参加者を整列させる、進行ルートを一歩化する設置箇所や設置数を固定するといった対応が求められる。
- 懇親会の受付** 懇親会参加希望者の受付、参加費支払い手続きを行う。
- アンケートなどの回収の際に懇親会への参加確認を兼ねて行ったため、懇親会会場ではその確認のみを行う予定であったが、十分な確認を行うことができていなかった。
- 書籍販売** エコ・リーグの出版物及び講師からの委託書籍の販売を行う。講師からの委託書籍には割引制度を設ける。
- 積極的な案内が少なかったため、利用者は少ない結果となった。
- エコ・リーグ入会申込受付** エコ・リーグの紹介・勧誘を行い、入会希望者の申込手続きをする。
- 司会の方から宣伝や事務局員の勧誘などが少なかったため会員獲得には至らず。交流が目的の従来のイベントと異なるための効果も考えられるが、より積極的な案内を行うべきであった。
- (4) 他の所轄にて処理を行うため該当業務なし。

— 資材管理 —

- (1) 当日搬入する物品の管理を行う。また、作成した資料の収集や管理を行う。
- (2) **物品リストの作成** 当日会場へ搬入する物品をエコ・リーグ事務所所有のものや本企画の会計で購入したもの協賛・後援団体所有物など分類し、数量を記載したものを作成する。また、不足品を検討し事前に補充を行う。
- 事前資料の収集** 当日以前に作成した資料を収集しリスト化する。
- 担当者が事前資料や当日資料の作成に追われたため、収集が徹底されなかった。資料の収集ルールを事前に作成しておく必要がある。
- (3) **物品リストの照合** 物品リストを照らし合わせながら分配・回収を行う。
- (4) **資料リストの作成** 企画書・各種申請書・事前資料・当日資料・報告書など作成した全資料のリスト化を行う。また、所有している担当者を把握する。
- 資料の収集・管理** 資料所有者に収集依頼を行う。収集した資料を分類し管理する。
- データ化されている資料と印刷物の資料があり、印刷物の資料は保管場所や部数が正確に把握できていない状況にある。事前から管理体制を整えておくべきであり、保管を考慮すると全資料がデータ化されている方が望ましい。

会計

- (1) 本企画における明瞭な資金運営を行うために、資金の管理および運営を行う。
- (2) **予算業務** 支出科目を検討し科目別予算分配の調整を行うとともに、参加費の設定など予算の検討を行う。企画原案・企画書・助成申請・協賛申請のそれぞれにおいて随時検討を行い、予算案を作成する。
- 支出は企画が具体化するほど変化し、収入は各種申請が進むほど変化するので、予算は随時検討をし続ける必要がある。予算が確定した段階で、予算案通りに資金変化を行えるようにしておくのが望ましい。
- 参加費管理** 予算に基づいた参加費を公表し、申込者の参加費を算出・集計を行う。また、参加費事前振込の集計や事前キャンセルの対応を行う。
- 本企画では事前キャンセルは、参加費を全額返金する形式を採用した。事後キャンセルなどキャンセル料にてトラブルを起こさないためにもキャンセルについては申込時に明確にする必要がある。また、申込者には参加費の支払を振込で行う方法を採用したが、事前振込をした申込者は6割程度であった。開催当日への負担の解消などのためにも、事前振込や事前申込の場合は参加費を割り引くといった特典を設けることも検討すべきである。
- 資金管理** 専用口座を開設し、現金および専用口座など資金の一括管理を行う。また、高額支払の振込業務や当日用釣銭準備を行う。
- やむを得ず高額立替が発生したため、例外的に速やかな高額立替の返金を行った。また、事前に高額立替が判明した場合は、立替金を事前に渡す対策を取った。
- (3) **資金管理** 参加費・懇親会費・書籍販売収入の保管・管理を行う。また、講師謝礼などの当日支出の管理を行う。
- 当日、資金を分割したため非効率であった。事前に用途ごとの資金分割を行っておく必要がある。
- (4) **領収証管理** 領収証カードを作成し、領収証の収集・データ化・支出集計・管理を行う。
- エコ・リーグ事務局立替や交通費補助の支給などのため、領収証カードのみではすべての支出を証明することができなかった。明確公正な管理を行うためには、領収証カードの不足を補う書類の作成が必要である。
- 交通費管理** 交通費補助支給ルールおよび交通費支給申請シートの作成を行う。また、交通費の総額の集計・交通費補助の支給額の算出を行う。
- エコ・リーグ交通費支給ルールの制定時期を挟む期間で、実行委員会を運営している都合上、本企画用のルール作りを行う。必要経費として認めるものは、全体ミーティングなど極めて限定した対象としている。
- 参加費管理** 参加費当日支払の集計および参加費の支払確認を行う。また、参加費未支払および事後キャンセルの入金後の対応を行う。
- 資金管理** 専用口座を解約し、現金などの資金の一括管理を行う。立替金の返済および交通費補助の支給を行う。
- 決算業務** 事前会計および当日会計について中間会計締めを行い、中間会計報告書を作成する。また、事後会計を含めた最終会計締めを行い、最終会計報告書を作成する。最終会計報告書は、エコ・リーグ理事会へ提出され審査される。

決算報告

支出の部】

科目	品目	支出見積	支出予測	増減率	占有率	科目計	占有率
施設 利用費	ミーティング会場	¥6,000	¥8,000	133.3%	0.7%	¥355,500	32.1%
	事前勉強会会場	¥12,500	¥12,500	100.0%	1.1%		
	イベント会場費	¥335,000	¥335,000	100.0%	30.3%		
親類会 準備費	親類会装飾費	¥7,000	¥9,000	128.6%	0.8%	¥137,500	12.4%
	親類会料理代	¥110,000	¥110,000	100.0%	9.9%		
	親類会飲食費	¥22,000	¥18,500	84.1%	1.7%		
保険費	イベント保険料	¥15,000	¥15,000	100.0%	1.4%	¥15,000	1.4%
資料 印刷費	田紙代	¥9,000	¥20,000	222.2%	1.8%	¥40,000	3.6%
	印刷代	¥8,000	¥20,000	250.0%	1.8%		
製本費	詰本製本代	¥180,000	¥150,000	83.3%	13.6%	¥150,000	13.6%
広報費	ポスター印刷費	¥37,000	¥37,000	100.0%	3.3%	¥63,000	5.7%
	チラシ印刷費	¥26,000	¥26,000	100.0%	2.4%		
通信 運搬費	郵送料	¥53,000	¥65,000	122.6%	5.9%	¥65,000	5.9%
	FAX送料料	¥7,000	¥0	0.0%	0.0%		
交通費	レンタカー代	¥0	¥15,000		1.4%	¥95,000	8.6%
	スタッフ交通費補	¥100,000	¥80,000	80.0%	7.2%		
謝礼	講師謝礼	¥210,000	¥138,000	65.7%	12.5%	¥138,000	12.5%
記録費	記録費	¥5,000	¥6,500	130.0%	0.6%	¥6,500	0.6%
雑費	資料代	¥0	¥3,000		0.3%	¥40,500	3.7%
	講師分当代	¥12,000	¥11,500	95.8%	1.0%		
	雑費	¥2,500	¥10,000	400.0%	0.9%		
	事前キャンセル返	¥0	¥16,000		1.4%		
合 計		¥1,157,000	¥1,106,000	95.6%	100.0%	¥1,106,000	100.0%

車務田品 振込手数料 遠隔地参加者宿泊費(全額予約分)など

収入の部】

科目	品目	収入見積	実収入	増減率	占有率	科目計	占有率
参加費	参加費	¥617,000	¥491,000	79.6%	44.4%	¥674,500	61.0%
	親類会費	¥140,000	¥183,500	131.1%	16.6%		
協賛会	協賛会	¥400,000	¥400,000	100.0%	36.2%	¥400,000	36.2%
その他	活動支援	¥0	¥31,500		2.8%	¥31,500	2.8%
合 計		¥1,157,000	¥1,106,000	95.6%	100.0%	¥1,106,000	100.0%

講師より活動支援として謝礼の寄付 協賛依頼企業より図書カード

備考】

・見積は第2期協賛資料と同等

・金額は五百円単位で記述

・事後活動(詰本や報告書の作成)のため支出は予測値

・協賛金は広報費、通信運搬費(渉外郵送料)、交通費、謝礼、記録費、雑費として使用(合計約40万円)

参加者アンケート

* 当日配布したアンケートをまとめました。有効票 145 枚、回収率は 72.1%でした。

参加してくれたのはこんな人たち

Q1 女性ですか？男性ですか？

性別	人数	割合
女性	65	45.1%
男性	76	52.8%
不明	4	2.8%

男女比はほぼ均等。

Q2 所属は？

所属	人数	割合
学部1年	39	27.1%
学部2年	34	23.6%
学部3年	28	19.4%
学部4年	18	12.5%
院生	8	5.6%
社会人	16	11.1%
その他	2	1.4%

やはり主体は学部生。当初は学部生の2~4年生をメインに捉えていたが、実際は1年生が最も多かったですね。しかし3、4年生がそれぞれ20名前後、さらには院生、社会人等も数名いたので、幅広い年齢層となったのではないのでしょうか。

Q3 エコリーグのイベントに参加するのは？

今回が初めて	87	60.4%
1~2回目	28	19.4%
3~4回目	8	5.6%
5回以上	20	13.9%

エコ・リーグの過去のイベントに参加したことのない人が過半数なので、「エコ・リーグの人脈以外からも人を集めたい」という目標は達成できたといえるでしょう。

Q4 環境団体、サークルなどに所属していますか？

	人数	割合
参加するつもりはない	21	14.6%
参加しようとしている	21	14.6%
メンバーとして参加している (していた)	66	45.8%
幹部として参加している (していた)	30	20.8%
その他	3	2.1%
未回答	4	2.8%

普段からサークルなどで活動されている人が多いですね。

このイベント、どんな風に知りました？

Q5 このイベントを知ったのはいつごろですか？

知った時期	人数	割合
4 月以前	30	20.8%
4 月前半	7	4.9%
4 月後半	18	12.5%
5 月前半	45	31.3%
5 月後半	32	22.2%
6 月以降	12	8.3%

始めに設定していた申し込み〆切は5月10日であったが、5月以降に80名強がこのイベントを知ったという結果が出ています。これは広報の遅れが最大の原因でしょう

Q6 このイベントについて見聞きしたものを選んでください。(複数回答可)

	人数	割合
友人や先輩の誘い	95	66.0%
サークル出張広報	13	9.0%
メーリングリスト	56	38.9%
当イベントホームページ	52	36.1%
その他のホームページ	11	7.6%
チラシ	40	27.8%
ポスター	36	25.0%
電話での勧誘	4	2.8%
エコリーグのイベント	29	20.1%
マスメディア	3	2.1%

どのように知ったかという質問に対しては「友人や先輩から」が最も多く、それから「メーリングリスト・ホームページ」等の電子媒体、「チラシ・ポスター」等の紙媒体と続く。参加の決め手になったものも「友人や先輩から」が圧倒的多数であり、やはり“人づて”の強さを痛感しました。一方、新聞や雑誌等のマスメディアは、労力のわりに効果が薄く、少々寂しいところではあります。

Q7 Q6 で選んだもののうち、参加のきっかけとなったのは？

	人数	割合
友人や先輩の誘い	75	52.1%
サークル出張広報	3	2.1%
メーリングリスト	14	9.7%
当イベントホームページ	8	5.6%
チラシ	4	2.8%
ポスター	4	2.8%
エコリーグのイベント	9	6.3%
マスメディア	1	0.7%

Q8 何を得たくてこのイベントに参加しましたか（3つまで回答可）

環境問題の知識	人数	割合
活動を共にする仲間	91	63.2%
情報を交換する仲間	17	11.8%
他の団体・個人の活動を知る	34	23.6%
所属団体に役に立つ情報	51	35.4%
活動に役立つ知識やスキル	11	7.6%
やる気	49	34.0%
講師との対話の機会	22	15.3%
なんとなく	22	15.3%
	11	7.6%

「環境問題の知識」が最も多く、それに次ぐのが「他の団体や人の活動状況を知る」「活動に役立つ知識やスキル」であり、これは自分の所属している団体へ還元しようという意思の表れかと思われます。これらと僅差で「情報を交換する仲間」「活動を共にする仲間」の「仲間探し」関連の項目が続きました。全体を通して、ギャザリング等の他のエコ・リーグのイベントのように交流よりも、知識を得たいという学習面に重きを置いている様子が窺えます。

Q9 参加に際して、次の項目をどれだけ重視しましたか？

（1 重視しない 2 あまり重視しない 3 どちらでもない
4 やや重視 5 とても重視）

	1	2	3	4	5	平均
参加費	21	30	31	38	24	3.10
分科会事前勉強会の日時	23	22	23	31	36	3.26
開催場所	36	22	33	32	19	2.83
知人が参加者・スタッフにいるから	49	22	24	25	21	2.62
企画の趣旨	1	3	16	42	82	4.40
パネルディスカッションの内容	6	14	31	44	50	3.81
青年活動発表の内容	13	36	38	27	27	3.13
分科会の内容	7	6	14	35	73	4.19
懇親会での交流	33	28	37	21	16	2.70
講師	17	17	26	39	35	3.43
エコリーグのイベントであること	55	29	35	8	15	2.29

Q10 今回のイベントについて、各項目の満足度を教えてください。

(1 とても不満 2 やや不満 3 どちらでもない 4 やや満足 5 とても満足)

	1	2	3	4	5	平均
パネルディスカッション	8	38	26	54	11	3.16
青年環境活動発表	5	8	26	54	26	3.74
分科会事前勉強会	1	3	8	28	28	4.16
分科会	0	3	6	30	46	4.40
シェアリング	1	13	21	33	11	3.51
進行のスムーズさ	14	39	35	40	13	2.99
休憩の取り方	3	12	57	49	19	3.49
イベントの雰囲気	2	10	42	52	34	3.76
他の参加者との交流	0	13	54	40	20	3.53
当日スタッフの対応	3	5	34	46	59	3.98
参加費	21	43	56	14	7	2.60
申し込みの返信	6	9	54	21	39	3.60
分科会担当者からの連絡	4	4	21	20	41	4.00
分科会メーリングリスト	4	4	26	23	32	3.84

最後に、今回のイベントに点数をつけるなら、100点満点で何点ですか？

	人数	
20点未満	1	
20～40点	2	
40～60点	8	
60～80点	38	平均 77.3点
80点以上	78	

5段階のアンケートの場合、1の「とても不満」に印を付けるのはよほどのことだと思いますが、「進行」と「参加費」は残念ながら10～20名が「とても不満」と記入していました。参加費は前々から議論になっていたもので予想できた反応ではあります。進行の方は当日の対応と事前準備の怠りが悔やまれました。PDの評価が低いのは、進行の不手際が影響しているでしょう。青年活動発表は予想していたよりもいい評価を得られました。分科会や事前勉強会も好評でした。イベント全体の雰囲気やスタッフの対応も良い結果であり、このイベントは概して成功を収めたと言えるのではないのでしょうか。

世代間環境フォーラム2003を振り返って

今回の世代間環境フォーラムは、あらゆる意味で実験であった。今回が初年度であり、主催団体のエコ・リーグにとって、実行委員にとって今まで経験したことのないイベントだった。

初年度であるというだけでなく、今回のイベントは、主催のエコ・リーグにとって未知のジャンルのイベントであった。実行委員から参加者、会場、運営費用まで、すべてにおいてきちんと集められるのかどうか、誰にも予想がつかなかった。それらの点を無事に解消できるのか、当フォーラムの運営開始した時には、また運営を開始した後も、多くの人はおそらく半信半疑であっただろう。

今回のイベントは、まさに実験であったのである。

それゆえに、イベントの開催に向けた活動は、多くの懸念を抱えたものだった。特に次の2つの懸念は大きかった。

まず、「世代間環境フォーラム」というイベントを運営する実行委員が集まるかどうかという点。運営する人がいなければ、どんなに高い理想を掲げたところで机上の空論になってしまう。これは運営開始前後の最大の懸念事項であったが、当初十数名だった実行委員も次第に増え、最終的に22名にまでなった。人数に関しては、あと5名ほどいたならばそれぞれの負担もかなり軽くなったと思われるが、しかし、なんとか無事開催するに足る人数を集めることができた。

そして、参加者が集まるかどうかという点。参加者が集まらなければ、今回のイベントの目的は達成することができない。参加者が集まるかどうか分からないのは多くのイベントに共通して言えることだが、当フォーラムのようなイベントをエコ・リーグでは久しく開催したことがなかったため、果たしてどれだけニーズがあるのか未知数だった。結果的に、広報の大幅な遅れにも関わらず、200名近い参加者を募ることができたことは、まずまずの成果といえる。また、当フォーラムのようなイベントにニーズがあるということを証明することができた。

協賛、分科会事前勉強会、多くの講師を一度に呼ぶということ・・・、懸念は尽きなかった。しかし、これらは、若干の不手際はあったものの、どれもおおむね乗り切ることが出来た。

さらに、今回のイベントをもとに1冊の冊子を作った。(次ページ参照)これもまた、一つの実験であり、多くの懸念を抱えたものであったが、なんとか完成することが出来た。

来年度以降に向けて

世代間環境フォーラム2003は、運営面、企画面、それぞれについて多くの成功と、多くの失敗があった。しかし、次回は、失敗した点を解消し、成功した点はより飛躍させていくことが大切である。現時点で来年度の開催は決まっていないが、今年これだけの成果をあげることができたイベントを、一年で終わらせてしまうのはもったいないと感じている。

運営次第で、まだまだ議論の質を高められる。規模を大きくすることもできるだろう。今回築いた基礎を生かしつつ、新たな一歩を踏み出せたらと思う。

環の道標

～ 未来を担う次世代へのメッセージ～

世代間環境フォーラム 2003 をまとめ、一冊の冊子に仕上げました。

地球環境問題の中で、身近でかかわりの深い、話題の「地球温暖化」。
環境問題とは、人間、社会そして地球、すべてが深く関わっています。

次世代を担う青年が今後の日本、社会、地球を支えます。
青年の活動、社会とのかかわりに期待。

環境を学ぶ者にぜひ読んで欲しい一冊です。

CONTENTS

特集1 温暖化への挑戦

若い世代の新しい価値観に期待 / 鈴木 紀夫氏 (ナットソース・ジャパン株式会社)
変革・簡素で質の高い暮らしへ / 畑田 響氏 (環境省)
NGO だからできること / 平田 仁子氏 (特定非営利活動法人気候ネットワーク)
エコスタイルでCO₂削減 / 佐々木 緑氏 (東京電力株式会社)
社会が築くエネルギー戦略 / 鳥井 弘之氏 (日本経済新聞社)

大特集 「構造」から斬る環境問題

環境と社会基盤

教育の展開とキーワード
環境倫理
報道の歴史を概観する
初心者のための税制講座
お金の流れから考える

食と生活

遅れるファーストフードの経営
生ごみから見るリサイクル
オーガニックを語る
やさしいスローフード

自動車と政策

これからのエコカー
クルマのゆくえ
かしこい道路の使い方

特集2 青年活動の歩みを探る

- 座談会 - 青年活動の「今」を語る
受け継がれし軌跡
～ Trace the growth rings ~
コラム >>> 環境意識の原点



環の道標 ～ 未来を担う次世代へのメッセージ～

発行 全国青年環境連盟 (エコ・リーグ)
編集 世代間環境フォーラム実行委員会
連絡先 〒162-0064
東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館 507
TEL / FAX 03-5225-7206

[illegible]

E-mail: eleague@mx.mesh.ne.jp URL: <http://www2.biglobe.ne.jp/~eleague/>

世代間環境フォーラム 2003 ～明日を担う青年の道標～ 事業報告書

2003年11月1日

発行 全国青年環境連盟（エコ・リーグ）

世代間環境フォーラム2003 実行委員会

編集 伊藤奈々恵・加藤洋一郎・福島宏希

印刷 東京ボランティアセンター

世代間環境フォーラム2003 公式Webサイト <http://www.geocities.co.jp/NatureLand/5150/>